

令和元年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第3号（7月予報）

令和元年6月25日 秋田県病害虫防除所

| | |
|--|---|
| <p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p> | <p>【問合せ先】</p> <p>秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251</p> |
| <p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は7月を主とします。次回の発表予定は令和元年7月30日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p> | |

I. 予報の要点

| | |
|------------|---|
| <p>水 稲</p> | <p>葉いもちの全般発生開始期は平年並、発生量はやや少ないと予想されます。余り苗は直ちに処分し、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は直ちに防除してください。</p> <p>斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）の発生時期は早く、発生量が多いと予想されます。本年は田面の露出した水田が多く雑草の多発が予想されるため、中・後期除草剤の使用にあたっては、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択してください。</p> |
| <p>野 菜</p> | <p>ねぎの病害ではさび病の発生量がやや多いと予想されます。多発すると防除効果が劣るので発病前の防除に努めてください。</p> <p>きゅうりの虫害ではアブラムシ類（ワタアブラムシ）の発生量がやや多いと予想されます。定期的に薬剤を散布してください。</p> <p>トマトの虫害ではヒラズハナアザミウマの発生量がやや多いと予想されます。被害果の摘果を行うとともに薬剤が花房に付着するよう丁寧に散布してください。</p> <p>えだまめの虫害ではツメクサガの発生量がやや多いと予想されます。幼虫の発生初期に防除を実施してください。</p> |

| | |
|-----|---|
| 花 き | きくではアブラムシ類とアザミウマ類の発生量が平年並と予想されます。ほ場周辺の除草に努めるとともに薬剤散布をしてください。 |
| 果 樹 | りんごではナミハダニの発生がやや多いと予想されます。発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布してください。 日本なしではナミハダニの発生が多いと予想されます。発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布してください。 ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ、同系統または作用点が同一の剤は年1回使用としてください。 |

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

| 作目名 | 病害虫名 | 対象地域 | 発生時期 感染時期 | 発生量・感染量 | |
|---------------|-------------------------------------|----------|--------------|--------------|------------|
| | | | | 現況 | 予報 |
| 水 稲 | 葉いもち | 全県 | 平年並 | — | やや少ない |
| | 紋枯病 | 全県 | やや早い | — | 平年並 |
| | 稲こうじ病 | 全県 | やや早い | — | やや少ない |
| | 斑点米カメムシ類 アカスジカスミカメ カビゴボシトリスカメ | 全県 | 早い 早い | やや少ない 平年並 | 多い やや多い |
| | フタオビコヤガ | 全県 | 平年並 | やや少ない | 少ない |
| | コバネイナゴ | 全県 | — | — | やや多い |
| | アワヨトウ | 全県 | — | 多い | やや多い |
| 大 豆 | ウコンノメイガ | 全県 | 平年並 | — | 平年並 |
| | 食葉性鱗翅目幼虫 | 全県 | — | 多い | やや多い |
| ねぎ (夏どり) | さび病 | 全県 | — | やや多い | やや多い |
| | べと病 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | アザミウマ類 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ネギハモグリバエ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| きゅうり | べと病 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | うどんこ病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | 斑点細菌病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | 全県 | — | やや多い | やや多い |
| キャベツ | コナガ | 全県 | — | 平年並 | やや少ない |
| | モンシロチョウ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ヨトウガ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| トマト | 灰色かび病 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | 葉かび病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ヒラズハナアザミウマ | 全県 | — | 多い | やや多い |
| えだまめ | べと病 | 全県 | — | — | 平年並 |
| | ツメクサガ | 全県 | — | 多い | やや多い |
| きく | 白さび病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | アザミウマ類 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | オオタバコガ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| りんご | 斑点落葉病 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | 黒星病 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | 炭疽病 | 全県 | — | — | やや多い |
| | 輪紋病 | 全県 | — | — | 平年並 |
| | 褐斑病 | 全県 | 平年並 | 平年並 | やや少ない |
| | シンクイムシ類 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | ナミハダニ | 全県 | — | やや多い | やや多い |
| | リンゴハダニ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ハマキムシ類 | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | 果樹カメムシ類 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | キンモンホソガ | 全県 | 早い | 平年並 | 平年並 |
| な し (日本なし) | 黒星病 | 県北部・県中央部 | — | 平年並 | 平年並 |
| | 黒斑病 | 県北部・県中央部 | — | 平年並 | 平年並 |
| | 輪紋病 | 県北部・県中央部 | — | — | 平年並 |
| | シンクイムシ類 | 県北部・県中央部 | — | やや少ない | やや少ない |
| | ナミハダニ | 県北部・県中央部 | — | 多い | 多い |
| | 果樹カメムシ類 | 県北部・県中央部 | — | やや多い | やや多い |
| ぶどう | べと病 | 県南部 | 平年並 | 平年並 | 平年並 |
| | 灰色かび病 | 県南部 | — | やや少ない | やや少ない |
| | 晩腐病 | 県南部 | — | 平年並 | 平年並 |
| | チャノキイロアザミウマ | 県南部 | — | 平年並 | 平年並 |
| 飼料作物 | アワヨトウ | 全県 | — | 多い | やや多い |

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|---------|---------------|------------|
| | 発生時期（全般発生開始期） | 発生量 |
| 1. 葉いもち | 平年並（前年並） | やや少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。
- イ、予察ほにおける微気象法による感染好適判定では、6月20日現在感染に好適な気象は観測されていない（ / ）。
- ウ、各地域振興局の水稲定点調査によると、6月10日現在あきたこまちの葉数は6.5葉（平年差+0.5葉）であった（- / ）。
- エ、6月3～4半旬の余り苗調査における発病地点率は1.5%（平年7.2%）で低かった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するため特に注意する。
- イ、余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。
- ウ、これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を2kg/10a散布する。
- エ、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤又はノンブラス剤の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|---------|-------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 紋枯病 | やや早い（-） | 平年並（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。
- イ、前年収穫期における発生量は少なかった（ / - ）。
- ウ、各地域振興局の水稲定点調査によると、6月10日現在あきたこまちの茎数は㎡当り180本（平年比121%）であった（- / +）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。
- イ、粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場や本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限定。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。
- ウ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は入水しない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|--------------|-----------------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 3. 稲こうじ病 | やや早い（前年より早い） | やや少ない（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。
- イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月10日現在のあきたこまちの葉数は6.5葉（平年差+0.5葉）であった（- / ）。
- ウ、前年収穫期の発生量は少なかった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、ラブサイドベフラン粉剤DL、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- イ、ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- ウ、銅剤は高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に散布する。
- エ、モンガリット粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は入水しない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|----------------------------|----------------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. 斑点米カメムシ類 （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ） （第1世代成虫） | 早い(前年よりやや早い) 早い(前年より早い) | 多い(前年並) やや多い(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。
- イ、予察灯におけるアカスジカスミカメおよびアカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代成虫の初誘殺日はいずれも早かった（- / ）。また、予察灯における6月3半旬までの誘殺数はアカスジカスミカメはやや少なく、アカヒゲホソミドリカスミカメは平年並であった（ / ± ）。
- ウ、本年は田面の露出した水田が多く、ホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエ（以下「雑草」という）の多発が予想される（ / + ）。
- エ、水田内の雑草の密度が近年高まっている（ / + ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長される。そのため中・後期除草剤の使用にあたっては、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択する。
- イ、稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に行う。
- ウ、水田畦畔刈り込み代用剤を7月上～中旬に散布すると40～50日の抑草効果が期待できる。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|------------------------------|--------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 5. フタオビコヤガ(イネアオムシ) (第2世代) | 平年並(-) | 少ない(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている(±/±)。
- イ、6月2～3半旬の抽出ほ場調査における第1世代幼虫による食害株率は0.1%(平年1.3%)でやや低かった(-)。
- ウ、6月3半旬までの予察灯における第1世代成虫の総誘殺数は0頭(平年11.8頭)で少なかった(-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、7月上旬の中齢幼虫(体長1～1.5cm)が主体の時期に上位3葉を調査し、被害株率が100%かつ食害度が25を超えない場合は防除の必要はない。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|-----------|------|-----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 6. コバネイナゴ | - | やや多い(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている(/±)。
- イ、前年乳熟期のすくい取り調査から、越冬量は多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、要防除密度は株当たり0.5頭以上(穂ばらみ期まで)であり、これは本田における20回のすくい取りで100頭以上である。
- イ、要防除密度に達したほ場では、若中齢期の7月上～下旬にトレボン剤またはMR・ジョーカー剤で畦畔を含めて防除する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|------------------|------|---------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 7. アワヨトウ(第1世代幼虫) | - | やや多い(-) |

(1) 予報の根拠

- ア、6月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は多かった(L 飼料作物の項参照)(/+)

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、本種は主にイネ科作物に被害を及ぼすため、小麦、牧草地等からの幼虫の移動、加害に注意する。特に中干し時に水田内に侵入しやすいため、畦畔、農道法面の雑草に発生が見られたら湛水状態を保ち、侵入を防ぐ。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は直ちにスミチオン乳剤で防除する。
- イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|----------------------------|------|-----|-----|--|
| | | 現況 | 予想 | |
| 褐色菌核病 | — | — | 少ない | 前年収穫期における発生量は少なかった。紋枯病との同時防除に努める（モンセレン剤を除く）。 |
| ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代) | — | — | 平年並 | 6月4半旬までの誘殺数はやや少ない～平年並に推移している。防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |
| コブノメイガ (第1世代) | 平年並 | — | 平年並 | 6月20日現在、飛来は確認されていない。防除適期は幼虫のふ化初期（発蛾最盛日7日後頃）である。 |
| セジロウンカ (第1世代) | 平年並 | — | 平年並 | 6月20日現在、飛来は確認されていない。防除適期は成虫飛来盛期の約3週間後であるため、今後の予察情報に注意する。 |

B 大豆

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|------------|--------|---------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. ウコンノメイガ | 平年並（—） | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、6月4半旬までに予察灯において誘殺されていない（±/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、生育が旺盛なほ場で多発する傾向があるので注意する。

イ、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合には、8月上旬までにサイアノックス粉剤、カスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソフフロアブル5等で防除する。

ウ、発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が主であると考えられ、急激に発生量が増加する場合があるため、今後の予察情報に注意する。

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|-------------|------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 食葉性鱗翅目幼虫 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬のえだまめの巡回調査における寄生茎率は15.9%（平年4.7%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ツメクサガの場合、幼虫の発生初期にエルサン乳剤1,000倍、トレボン乳剤1,000倍、フェニッ

クスフロアブル4,000倍液のいずれかを散布する。
 イ、老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

C ねぎ（夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. さび病 | — | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
 イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は1.9%（平年1.0%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、気温が15～20℃で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いので予防や発病初期の防除に努める。
 イ、発病がみられる場合は、直ちにアミスター20フロアブル、オンリーワンフロアブル等を散布する。ただし、アミスター20フロアブルを連用する場合は薬害防止のため散布間隔を2週間以上とする。
 ウ、気温の上昇とともに病勢は衰えるが、病斑密度の高いほ場は伝染源（夏孢子）が越夏し秋期の発生要因になるため防除を徹底する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. べと病 | — | やや少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
 イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2%（平年2.1%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、気温が15℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いので予防や発病初期の防除に努める。
 イ、発病がみられる場合は、直ちにリドミルゴールドMZやアミスター20フロアブルの治療効果がある薬剤を散布する。ただし、リドミルゴールドMZは収穫30日前までの使用となるため、散布時期に注意する。また、アミスター20フロアブルを連用する場合は薬害防止のため散布間隔を2週間以上とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------------|---------|-------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. アザミウマ類（ネギアザミウマ） | — | 平年並（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は13.6%（平年11.4%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン・スタークル顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブル等を茎葉散布、または、ダントツ粒剤を株元散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. ネギハモグリバエ | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は15.6%（平年12.4%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。

イ、ネギアザミウマとの同時防除に努める。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|---------------------|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| アブラムシ類 (ネギアブラムシ) | — | — | 平年並 | 防除が必要な場合は少ないと見込まれる。 |

D きゅうり

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. ベと病 | — | やや少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0.6%）でやや低かった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、敷きわら等を行い、雨による土のはね上りを防ぐ。

イ、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフフロアブル、リドミルゴールドMZ等の治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。

オ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

カ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. うどんこ病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン剤、ポリオキシシムAL水和剤、ポリベリン水和剤、パルミノ等の治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとともに散布する。

イ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

ウ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 斑点細菌病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0.9%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、強風等により傷が付くと感染しやすくなるので防風対策を講じる。

イ、ほ場の排水を改善する。また過繁茂による通風不良や過剰施肥を避ける。

ウ、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

エ、有機銅剤、無機銅剤による予防散布に努める。

オ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合は薬剤の散布間隔を短くする。

カ、銅水和剤は効果が高いが、茎、葉が硬化する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | — | やや多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発生株率は18.3%（平年15.0%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場周辺の除草を徹底する。

イ、定期的に薬剤を散布する。ただし、薬剤抵抗性出現回避のため、異なる系統の薬剤のローテーションを考慮する。

ウ、ウイルス病の伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

E キャベツ（初夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. コナガ | — | やや少ない（－） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は121頭（平年198.5頭）でやや少なかった（ /－）。

ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.2頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫が見られる場合は、アフーム乳剤、コテツフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤、プレバソフフロアブル5等を散布する。収穫前日数に注意して、薬剤の選定を行う。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|---------|--------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. モンシロチョウ | — | 平年並（－） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------|---------|--------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ヨトウガ（第1世代） | — | 平年並（－） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は2頭（平年2.1頭）で平年並であった（ /±）。

ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

F トマト

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 灰色かび病 | — | やや少ない(前年並) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0.2%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤の耐性菌が確認されているため、薬剤の選択に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 葉かび病 | — | 平年並(前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からの予防散布に努める。
- エ、耐性菌出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ヒラズハナアザミウマ | — | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、北秋田市予察ほにおける6月3半旬の青色粘着板への誘殺数は57頭（平年22.2頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるため除草に努める。
- イ、急増期（青色粘着板での10日当たり誘殺数がおおむね50頭/250cm²以上、かつ、誘殺数が前回誘殺数のおおむね5倍以上）を確認したら防除を開始する。
- ウ、スピノエース顆粒水和剤、バストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤等を花房に付着するように丁寧に散布する。ただし、抵抗性出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|------|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| 疫病 | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な場合は少ないと見込まれる。 |

G えだまめ

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|--------|------|----------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. ベと病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。

イ、フェスティバルC水和剤600倍、ライメイフロアブル2,000倍、ランマンフロアブル1,000倍、レーバスフロアブル2,000倍液を散布する。

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|----------|------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. ツメクサガ | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における寄生茎率は15.9%（平年4.7%）で高かった（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫の発生初期にトレボン乳剤1,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍液を散布する。

イ、老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

H きく

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|---------|------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. 白さび病 | — | 平年並（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）で平年並であった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉は摘み取り、ほ場外で処分する。

イ、窒素過多が発病を助長するので、窒素の多用を避ける。

ウ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は4.0%（平年5.1%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場周辺の雑草地は発生源となるため除草に努める。

イ、ウイルス病の伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

ウ、薬剤抵抗性出現回避のため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ) | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるため除草に努める。

イ、茎葉散布を実施し、密度低下を図る。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. オオタバコガ | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

ウ、防除適期決定ほ（秋田市）における6月1～4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は1頭（平年2.1頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年8月以降被害が多くなるが、近年被害の出始める時期が早い傾向にあるため、発生初期の防除に努める。

I りんご

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 斑点落葉病 | — | やや少ない（前年より少ない） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0.1%）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシナL水和剤、ユニックス顆粒水和剤47、ロブラール水和剤のいずれかを主剤に加用して使用する。また、これらの薬剤は年間1回の使用とする。ただし、ポリオキシシナL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI剤（ストロビルリン系剤）は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。
- エ、ベフキノロン水和剤、ベフラン液剤25は、千秋、王林で果実色に障害が生じるおそれがあるので7月中旬以降に使用する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 黒星病 | — | やや少ない（前年より少ない） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病果そう率は0.2%（平年1.1%）、発病地点率は4.5%（平年9.6%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。
- イ、夏期の高温乾燥条件下では感染・発病が抑制されるものの、秋期の降雨により感染が再び拡大するおそれがあるため、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- ウ、QoI剤（ストロビルリン系剤）は耐性菌出現回避のため、作用機作の異なる保護殺菌剤を加用し、年間2回以内の使用とする。なお、QoI剤耐性菌が確認された園地及び発生が多い園地等ではQoI剤の使用を中止し、保護殺菌剤を10日以内間隔で散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 炭疽病 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の降水量は多く、一次感染量は多かったと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、ニセアカシアは伝染源となるため、園地の近くにある木は伐採する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|--------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 4. 輪紋病 | — | 平年並（—） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|-------------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. 褐斑病 | 平年並（前年より遅い） | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病新梢率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

ウ、5月の降水量はかなり少なかったため、一次感染量は少なかったと推定される（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、多発が予想される場合は、7月中～下旬にトップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを主剤に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌出現回避のため、年間1～2回の使用とするが、これらの効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47を主剤に加用して散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ) | — | やや少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、前年秋期の被害果率はやや低かった（ /—）。

イ、防除適期決定ほ（県内3か所）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は28頭（平年38頭）でやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤を使用する場合の散布時期は県北部が7月上～中旬、県中央部・県南部の未散布園では7月上旬までである。

ウ、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため、高温時や衰弱樹に散布しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. ナミハダニ | — | やや多い（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.012頭（平年0.005頭）でやや多く、発生地点率は31.8%（平年6.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では直ちにスターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブルのいずれかを散布する。ただし、スターマイトフロアブル、ダニサラバフロアブル、ダニコングフロアブルは県南部の一部地域で効力低下が認められているため、このような園地では使用しない。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 8. リンゴハダニ | — | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭（平年0.00頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では直ちにスターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブルまたはサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤のいずれかを散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用とし、効力低下を防止する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 9. ハマキムシ類（第1世代） （リンゴコカクモンハマキ） （リンゴモンハマキ） | — | やや少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、6月中旬の巡回調査における寄生新梢率は0%（平年0.2%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤はエクシレルSE、オリオン水和剤40、サムコルフロアブル10、ダーズバンDF、ディアナWDG、テッパン液剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。なお、県南部のリンゴコカクモンハマキ幼虫に対するダーズバンDFの効力低下園では同剤を使用しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 10. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ) | — | 平年並 (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、防除適期決定ほ(4か所)における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップの果樹カメムシ類の総誘殺数は155頭(平年149頭)で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR、ジョーカー水和剤のいずれかを散布する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

エ、スミチオン水和剤40は薬害(黄変落葉)が発生するおそれがあるため、高温時や衰弱樹に散布しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------|------------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 11. キンモンホソガ(第3世代) | 早い(前年より早い) | 平年並(前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (±/±)。

イ、横手市予察ほのフェロモントラップにおける第一世代成虫の誘殺盛期は6月2半旬(平年6月4半旬)で早かった (-/)。

ウ、6月中旬の巡回調査における被害葉率は0.1%(平年0.1%)で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除時期は県北部で7月4～5半旬、県中央部・県南部は7月3～4半旬と見込まれる。

J なし(日本なし)

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 黒星病 | — | 平年並(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.02%(平年0.05%)で平年並、発病果率は0%(平年0.06%)でやや低かった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害部位は除去し、園外へ搬出し処分する。

- イ、防除剤の散布間隔は10日とする。降雨が続くと予想される場合又は発生の見られる園地では、散布間隔を7日とする。幸水は本病に弱いので特に注意して防除する。
- ウ、有袋栽培の場合は、防除剤を散布した後の袋かけを速やかに行う。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|---------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 黒斑病 | — | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.7%（平年1.3%）で平年並、新梢葉の発病葉率は0.3%（平年0.6%）でやや低かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲に発病が多い。

イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、焼却する。

ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では、散布間隔を7日とする。

エ、多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤を主剤に加用するか、ベルクガード水和剤又はポリキャプタン水和剤を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシシン剤の使用回数は年間3回以内とする。

オ、袋かけ前の防除を徹底し、散布後は袋かけを速やかに行う。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|--------|
| | 感染時期 | 感染量 |
| 3. 輪紋病 | — | 平年並（—） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|-------------------------|------|------------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 4. シンクイムシ類 （モモシンクイガ） | — | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、前年収穫期の被害果率から、越冬量は平年並と推定される（ /±）。

イ、防除適期決定ほ（県内4か所）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は28頭（平年65頭）でやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤で防除する場合、県中央部の未散布園では直ちに、県北部では7月上～中旬に実施する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害（葉裏に黒色斑）を発生させるおそれがあるため、これらの品種にかからないようにする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|---------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. ナミハダニ | — | 多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.06頭（平年0.00頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、焼却する。

イ、発生が多い園地ではスターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブルのいずれかを散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用とし、効力低下を防止する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ） （チャバネアオカメムシ） | — | やや多い（前年より多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、防除適期決定ほ（県内4か所）における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップの果樹カメムシ類の総誘殺数は133頭（平年91頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、スプラサイド水和剤の使用時期は無袋栽培では収穫21日前まで、有袋栽培では収穫7日前までであるため、散布時期に注意する。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|-----------------------|------|-------|-------|--------------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| リンゴハダニ | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な園地は少ないと見込まれる。 |
| アブラムシ類 (エキヤギアブラムシ) | — | やや少ない | やや少ない | シンクイムシ類及び果樹カメムシ類と同時防除する。 |

K ぶどう

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|--------|-----------|-----------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. ベと病 | 平年並 (前年並) | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (±/±)。

イ、6月中旬の巡回調査において、巨峰の発病葉率及び発病花穂率はいずれも0% (平年0%) で平年並であった (/±)。

ウ、前年9月の発病葉率は2.2% (平年4.5%) で平年並であった。 (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病が見られる場合は、袋かけを7月中旬までに行い、袋かけ後直ちに薬剤を散布する。

イ、散布する薬剤は、エトフィンフロアブル、コサイド3000、ジャストフィットフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブル、ムッシュボルドーDF、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル、ICボルドー66D、Zボルドー又は4-4式ボルドー液のいずれかとする。

ウ、ホライズンドライフロアブルは果粒が小豆大以降の散布で、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル及びランマンフロアブルは大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱を起こすおそれがあるため、その前に散布する。また、ボルドー剤は袋かけ後に使用する。

エ、ムッシュボルドーDF、Zボルドーおよびコサイド3000は、薬害 (落葉) のおそれがあるのでクレフノン100倍を加用する。

オ、QoI剤、QiI剤、カルボン酸アミド剤又はシモキサニルを含む農薬は薬剤耐性リスク低減のため、年間1~2回の使用とし、同一系統薬剤を連用しない。

| 病害虫名 | 予報内容 | |
|----------|------|-------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 灰色かび病 | — | やや少ない (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率はキャンベル・アーリーが0% (平年0.1%)、巨峰が0% (平年0.1%) でいずれもやや低かった。発病花穂率は、キャンベル・アーリーが0% (平年0.5%)、巨峰が0% (平年0.9%) でいずれもやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、花冠や不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるため、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。

イ、発病果房のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため焼却する。

ウ、散布する薬剤は、オーソサイド水和剤80、オンリーワンフロアブル、パスワード顆粒水和剤、ピクシオDF、ポリオキシシリンAL水溶剤又はポリベリン水和剤のいずれかとする。ただし、ポリオキシシリンAL水溶剤及びポリベリン水和剤の使用時期は収穫60日前まで、オーソサイド水和剤80は収穫30日前まで、パスワード顆粒水和剤は収穫14日前までであるため、散布時期に注意する。また、オンリーワンフロアブルの使用は7月中旬までとする。

エ、上記薬剤のうちオーソサイド水和剤80以外の薬剤は、耐性菌出現回避のため、いずれも年間使用回数を1回とする。また、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 晩腐病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、開花期巡回調査における発病花穂率はキャンベル・アーリーが0%（平年0.1%）、巨峰が0%（平年1.0%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病果房は摘み取り、焼却する。

イ、散布する薬剤はオーソサイド水和剤80又はオンリーワンフロアブルとする。ただし、オーソサイド水和剤80の使用時期は収穫30日前までであるため、散布時期に注意する。

ウ、笠かけや袋かけは7月中旬までに終わるようにし、薬剤の散布後7日以内に実施する。やむを得ず7日以上空ける場合は、笠かけや袋かけの前に追加散布を行う。

エ、耐性菌出現回避のため、オンリーワンフロアブルは年間使用回数を1～2回とし、連用は避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. チャノキイロアザミウマ | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における被害花穂率はキャンベル・アーリーが0%（平年0%）、巨峰が0%（平年0%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い場合は、ダントツ水溶剤やモスピラン顆粒水溶剤、ディアナWDG、スカウトフロアブル、バイスロイドEW等を散布する。

イ、ダントツ水溶剤は小豆大期以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDGは大豆大期以降の散布で果粉溶脱を生じるおそれがあり、その前または袋かけ以降に使用する。

ウ、防除薬剤を散布後、早めに袋かけを行う。

L 飼料作物

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|------------------|------|--------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. アワヨトウ（第1世代幼虫） | — | やや多い（前年より多い） |

（1）予報の根拠

ア、6月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は、能代市25頭（平年5.5頭）で多く、由利本荘市0頭（平年2.2頭）でやや少なく、両地点では25頭（平年8.0頭）で平年より多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とする牧草地は少ないと見込まれるが、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合はスミチオン乳剤で防除する。牧草の刈り取りはスミチオン乳剤散布後14日以降に行う。
イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和元年6月20日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（6月22日～7月21日）

（1）予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

| | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 30% | 30% | 40% |
| 降水量 | 40% | 30% | 30% |
| 日照時間 | 30% | 30% | 40% |

（3）気温経過の各階級の確率

| | 低い | 平年並 | 高い |
|-----------|-----|-----|-----|
| 6/22～6/28 | 20% | 30% | 50% |
| 6/29～7/5 | 30% | 50% | 20% |
| 7/6～7/19 | 40% | 30% | 30% |

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～6月4半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|------|----|-----|----|----|-----------|------|----|----|----|----|-----|
| 日数 | ~-6 | -5 | -4 | -3 | -2 | -1 | 平年 発生日 | +1 | +2 | +3 | +4 | +5 | +6~ |
| 評価 | 早い | やや早い | | 平年並 | | | | やや遅い | | 遅い | | | |

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

| | | | | | | |
|----|----------|-------|-----|-----|------|-----|
| | 平年値 ↓ | | | | | |
| 度数 | 10% | 20% | 20% | 20% | 20% | 10% |
| 評価 | 少ない | やや少ない | 平年並 | | やや多い | 多い |

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

| 出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い)) | 解説 |
|----------------------------------|-------------|
| 高い(多い)確率が50%以上 | 高い(多い) |
| (20:40:40) | 平年並か高い(多い) |
| 平年並の確率が50%以上 | 平年並 |
| (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40) | ほぼ平年並 |
| (40:40:20) | 平年並か低い(少ない) |
| 低い(少ない)確率が50%以上 | 低い(少ない) |

半月のとり方

ここで扱われる「半月」とは暦日半月のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半月は1日から5日まで、2半月は6日から10日までであり、以降6半月まで5日ごとに該当する期間を指します。

2019年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

令和元年6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。